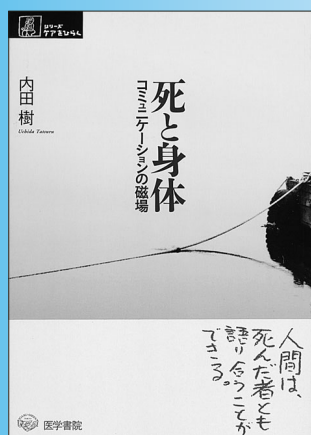


ケアする人生， ケアされる人生を豊かにする一冊

【評者】反町吉秀 青森県東地方健康福祉こどもセンター保健部(青森保健所)

死と身体 コミュニケーションの磁場

内田
樹(著)



定価 2,100 円(本体 2,000 円+税 5%)
A5判, 242 ページ
医学書院(Tel.03-3817-5657)

本書は、フロイトの精神分析、レヴィナス哲学、武道の修行を 1 つのものとして受け止める哲学者・内田樹氏による「よりよく生きるための技法」についての珠玉の論文集である。

著者は「第 1 章 身体からのメッセージを聴く」において、社会全体が「脳化」し、脳-身体二元論が一般化するなかで、「身体は私の道具なのであるから、好きなだけこき使って良く、身体はそのすべてのリソースを捧げて脳の欲望に奉仕すべきである」というひとつのイデオロギーが猛威をふるっている、と厳しく指摘する。ここでの議論から、医学的なものの見方に内在する脳-身体二元論の危うさに気づき、脳も身体の一部であることを踏まえ、身体の声に耳を傾けることの大切さとその意義を知ることができる。また、本書のなかではとくに議論されていないが、日本社会における社会現象としての過労死にも、このイデオロギーは多大な寄与をしているかもしれないと評者は思う。

若年者ほどこの問題は深刻化しており、たとえば援助交際やリストカットの背景には、自分の身体以外に自由にできる社会的リソースを持たない人間が自分の身体を傷めることで、自分にも支配できるものがあることを確認し、心理的な浮力を得ようとしている、という。

次に話は、「死んだ後の私との出会い」や「死者からのメッセージを聴く」ことに及ぶ。著者によると、動物と人間を決定的に分けるのは、「死んだ後」という境界をありありと想像し、「葬礼」を行う習慣を獲得したことである、という。死者は、死んで「いる」のであり、葬礼は、生体と死体の間に、「死者」というどちらにも属さない第 3 のカテゴリーをつくることであり、「なかなか死なせないための儀礼」であるという。そして、死者からのメッセージ、および死につつまある者のメッセージを聞き取る能力が、人間性を基礎づける根本的な能力である、という。さらに、「死んだ後の自分」を「現在」に想定してそこから自分の過去やいまをみることができる、そのような時間意識を持つことのできる人間はよりよく生きることができる、と言及する。

病める人、死に行く人を病院や地域でケアしたり、看取ったりする人に、本書をお薦めしたい。なぜなら、生から死を考えるだけでなく、死から生へと向かうベクトルで考えてみることで、ケアする人の生を、ひいてはケアされる人の生を豊かにしてくれると思われるからである。

ところで、「災い」の年 2004 年の最後に本書に出会えたことは、評者にとっては大いなる幸せであった。「らせん状」の構成を持つ本書を読み進むのはやや骨が折れたが、じっくり味読することにより、実に素敵な「気づき」にたくさん出会えたのだから。